

モーニングセミナー 9 【MS9】

日時：2026年4月11日（土） 7:45～8:45

会場：Room 5 411 + 412（福岡国際会議場）

第130回 日本眼科学会総会「第18回 公益財団法人一新会モーニングセミナー」

視機能の基礎と臨床

オーガナイザー

令和8年4月11日（土）

相原 一 （公財）一新会副理事長・東京大学名誉教授
山上 聡 （公財）一新会理事・日本大学眼科教授

視機能は光覚、色覚および視力の3要素に視野を加えた要素が重要であり、これらの病態生理は眼科学および日常の眼科臨床において常に考慮される必要がある。一新会セミナーでは視機能の基礎と臨床を基本テーマとして開催しており、今回のセミナーにおいては定量的色覚検査および後天色覚異常が生じる可能性のある加齢黄斑変性に関するテーマを取り上げた。

講演

Session 1

■ 定量的色覚検査法

(波長弁別閾値測定)の臨床的意義

(公財)一新会理事長・日本大学名誉教授
澤 充

臨床における視覚検査法は、仮性同色表、色相配列、混色率によるアノマロスコープなどがあるが、定量的色覚検査法であり、かつ先天性色覚異常が対象である。しかし、色の認知力は波長によって異なることがプリズムによる定量的分光測定装置で生理学的に解明されている。また、この装置では後天色覚異常の程度が判定できることも報告されている。しかし、プリズムによる分光測定は装置、検査に要する時間などの問題から臨床応用には問題が多い。今回、2台の分光器を使用した波長弁別閾値測定装置を開発し、臨床的に正常色覚、先天性色覚異常および網膜黄斑症例での検査を行った結果について報告する。

Session 2

■ 加齢黄斑変性の診断から治療

日本大学病院眼科教授・アイセンター長
中静 裕之

2024年に加齢黄斑変性 (age-related macular degeneration: AMD) の診療ガイドラインが改訂され、パキコロイドや黄斑新生血管など、新しい概念や分類が導入された。日常診療では、これらの理解を踏まえた上で、より適切な診断と治療方針の選択が求められている。

現在、AMD治療の中心は抗VEGF (vascular endothelial growth factor) 薬であるが、病態や治療反応性には個人差が大きく、長期管理が重要となる。黄斑下出血を生じた場合には迅速な対応が必要であり、硝子体出血を伴う際には手術も含めた総合的判断が求められる。本セミナーでは、最新のガイドラインの要点を概説し、当院における診断から治療までの実際を紹介する。



後援：厚生労働省

共催：第130回 日本眼科学会総会
公益財団法人 一新会

共催：公益財団法人一新会